

## 論文

「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（3）  
—「子ども学フィールドワークⅠ」の教育方法—髻 櫛 久美子  
野 田 さとみ

## 1. はじめに

数年来、4年制大学における保育者養成の教育プログラムを、津守真の保育思想<sup>1</sup>とD・ショーンの「反省的实践家（reflective practitioner）」の概念とその教育の方法<sup>2</sup>を参考に検討してきた。その結果、少子化、情報化社会に育つ今日の学生に対応した保育者養成プログラムを考案した。

「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」という学びの循環を4年間繰り返すという教育方法を特色とし、幼児教育・保育における知識・技術を学び、学習したことをフィールドに出て観察や実践をして確かめ、「省察（reflection）」（以下「省察」と記す）し、次の学びにつなげていくという教育である。学びの循環により、「省察力」が深まり、「保育を探究」する力をつけることで自律的に学ぶ姿勢を持ち、自らのキャリアステージに応じて「成長し続ける保育者」を養成できると考えた教育プログラムである。日本保育学会で発表し、<sup>3</sup>このプログラムの理論的背景と4年間の学びの仕組みを、本学紀要創刊号に2編の論文<sup>4</sup>としてまとめた。

今後の課題は2つある。1つ目は、考案したプログラムが理論的背景を踏まえ、4年間のプログラムとして一貫したものとなるよう、中心に据えた科目の具体的な教育方法を明らかにすることである。中心となる科目とは、1年次から3年次の「子ども学フィールドワークⅠ、Ⅱ、Ⅲ」と4年次の「子ども学研究ゼミナール」である。これらの科目を学生が受講することにより、各学年で履修される他の科目と関連を持ちながら「省察力」を深め、「保育を探究」する力となり、自律的に学ぶ姿勢を持つことができるような教育方法を具体的に示すことである。2つ目は、実施した教育の実践的検証である。これから学年ごとに実施されるプログラムにおいて、学生が何を学んだか検証を行うとともに、授業者も共同で省察を繰り返し、このプログラムの有効性を高めていくことである。

本稿では、1つ目の課題に取り組み、プログラムの1年目として実施する「子ども学フィールドワークⅠ」に関して、具体的な教育方法を明確にする。そのために、まずは、「成長し続ける保育者」を養成するプログラムの特徴から、4年間の学びの中での「子ども学フィールドワークⅠ」の位置づけを確認する。次に、実際に授業実践が行えるように、「子ども学フィールドワークⅠ」の授業概要、1年間の授業計画、学びの循環について明確にする。そして、自律的に学ぶ姿勢を育てるための方策として、学生の学びが主体的なものとなるような教育方法について検討する。2つ目の課題に関しては、本稿で明確にした教育方法に基づき、教育実践を試みることで浮かび上がった課題として、続く論稿「「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（4）」で検討することとする。

## 2. 「成長し続ける保育者」を養成するプログラムの特徴

ここでは、「子ども学フィールドワークⅠ」の教育方法を検討するために、「成長し続ける保育者」を養成するプログラムの特徴から、プログラム全体における「子ども学フィールドワークⅠ」の位置づけを明確にする。本プログラムは、「一人一人の子どもに寄り添い、保育を創造する保育者へと成長し続ける実践家」を養成目標とし、「反省的実践力」の基礎として、自ら課題を見出し、問題を設定し、解決していく力、すなわち「反省的思考の習慣」を身につけることを目的とした、「成長し続ける保育者」を養成する教育プログラムである。

教育方法の理念は、「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」という学びの循環である。学びの循環は、幼児教育・保育に関する理論や技術を学ぶ「子どもを学ぶ」と、それらを保育の日常で実践し試す「子どもに学ぶ」と、自らの実践を振り返り、仲間とともに対話し発表することで省察し次の学びへと高める「ともに学ぶ」から成り立っている。学びの循環は、1年次から3年次の「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ」と4年次の「子ども学研究ゼミナール」を中心に実施される。教育方法としての学びの循環は、「理論と実践の往還」と「省察」、そしてこれらを「習慣化」することで、「反省的実践力」を磨き続ける保育実践家を育成しようと考えたものである。

「子どもに学ぶ」として、1年次から免許・資格取得のための実習とは別に、保育の日常で学ぶことを確保している。理論的な背景としては、津守真<sup>5</sup>とショーン<sup>6</sup>の二人の主張から、「反省的実践家」を育てる専門家教育は「実践知」の学びであり、早い時期から実践的に学ぶことが重要性であると考えたからである。「子どもを学び」「子どもに学ぶ」そしてそれらを関連付けて振り返る「ともに学ぶ」、この循環は「理論と実践の往還」として作用すると考える。

「省察力」の重要性に関してショーンは、「反省的実践家は行為しながら考えている<sup>7</sup>」と主張している。つまり、活動過程の最中に、「状況との対話」により「省察」しながら問題の把握をしているというのである。また、津守真も、「保育の実践と省察は切り離すことができない。子どもとかわかり身を動かしている最中にも、保育者は子どもの行為を読み、それに応答している<sup>8</sup>」と保育の最中にも省察が行われていると述べている。しかし、反省的実践家のように子どもの姿、状況を読み取り瞬時に応答することは、最初からできることではない。そこで、養成課程における教育プログラムとしては、「反省的実践家」を目指して学び続けることができるよう、その基礎として「反省的思考の習慣」を身につけることを目的とした。

津守真は、「子どもたちが眼前からさったあと、保育者は、差し迫った現実の要求からひととき解放され、子どもと応答していた時の体感や物質のイメージなどを思い起こす、一人になって実践の後を振り返るときに、保育者は自分が巻き込まれて応答していた最中の意味をより深く考えることができる。また、保育の後に同僚と話し合うとき、同じ子どもの全体像が見えてくる<sup>9</sup>」と述べている。保育の省察について、実践の事後に振り返ることの有効性と、一人で振り返ること、また仲間とともに振り返ることの両方の意義を述べている。そこで、「ともに学ぶ」として実践の事後に省察を仲間とともに対話的に深める構成とした。

「反省的実践力」を磨き続ける保育実践家を育成するために、「理論と実践の往還」と「省察力」の育成、そしてこれらを「習慣化」する方策として、学年が進むにつれて、「反省的思考の習慣」を身につけるためのステージは、課題が高次なレベルへと上がっていくよう設定した。1年次から、順番に説明する。

1年次「子ども学フィールドワークⅠ」では、子どもに出会い、子どもの側に身を置き子どもを理解することを目的としている。「子どもに学ぶ」は、幼稚園での観察学習として実施される。「ともに学ぶ」では、自己の観察を記録しグループで振り返りクラス発表をして次の課題を見出す。発表・討議を通して、仲間とコミュニケーションする力をつけることを目指している。

2年次「子ども学フィールドワークⅡ」では、子どもと交わり、子どもの行為と表現のかかわりから子どもを理解することを目的とする。「子どもに学ぶ」は、保育所で子どもとかかわることにより実施される。「ともに学ぶ」では、実践学習を記録する力、プレゼンテーションする力、仲間の発表を聞く力をつけることを目指している。

3年次「子ども学フィールドワークⅢ」では、保育を実践して、子どもを理解することを目的とする。「子どもに学ぶ」は、子育て支援の場で、保育実践をすることを通して保育実践のプロセスを理解するとともに、反省的思考の意義を理解する。「ともに学ぶ」では、保育実践のために議論する力をつけることを目指している。

4年次「子ども学研究ゼミナール」では、子ども学探求により、子どもを理解することを目的とする。探求するテーマは、1年次から3年次までのフィールドでの学びや免許・資格取得のための実習、学内での理論や技術の学習プロセスから各自見出し設定する。「子どもに学ぶ」は、そのテーマに取り組むために、実践研究はもちろんのこと、理論研究においても保育の日常で研究内容を確認する作業となる。「ともに学ぶ」は、子ども学探求のために議論する力を身につけることを目指している。

「成長し続ける保育者」を養成するプログラムは、以上のような学習プログラムであり、特徴の第1は、「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」という学びの循環である。第2の特徴は、この循環が4年間繰り返され、螺旋を描きながら「反省的思考の習慣」が高められるようにデザインされている点にある(図1 プログラムの特色 「4年間の学びの循環」 参照)。「子ども学フィールドワークⅠ」は、このような特徴を持つプログラムの第1ステージなのである。以上の考察を踏えて、「子ども学フィールドワークⅠ」の教育方法を考案する必要がある。

### 3. 「子ども学フィールドワークⅠ」の授業概要

以上の考察を踏えて、ここからは、「子ども学フィールドワークⅠ」の具体的かつ詳細な教育方法を明確にしていくこととする。本授業は、上記2「成長し続ける保育者」を養成するプログラムの特徴に述べたように、「反省的思考の習慣」を身につけるための第1ステージである。「一人一人の子どもに寄り添い、保育を創造する」ためには子ども理解が重要となる。第1ステージは、子どもの側に身を置いて子どもを理解するために、観察する力をつけることが課題である。幼稚園での観察と振り返りを中心に学習する。

ショーンの主張するように「実習」という状況に早くから身を置くことは重要であるが、そのためには、その前提として最低限必要な学びを学生に提供する必要があると考える。そこで、前半は初年次教育を実施する。「子どもに学ぶ」は、保育現場に出るための前段階として、①保育者への目的意識・意欲、②学生・社会人としてのマナーを、また、「省察」するため「ともに学ぶ」の基礎学力として、③文章力と図表の読み方・書き方等の基礎に關した教育を実施する。

後半は、観察の視点 ①保育の環境、②子どもの生活、③子どもの発達、④子どもの運動、⑤子

どもの人とかかわり）指導を「子どもを学ぶ」として行い、「子どもに学ぶ」として学生は幼稚園での観察を5回実施し、「ともに学ぶ」として各自の振り返りをもとにグループ討議とグループ単位のクラス発表を実施する（図2「子ども学フィールドワークⅠ」授業概要 参照）。

循環による成果は、「子どもを学ぶ」では、子どもの側に身を置き子どもを理解するための知識を観察の視点として学習し、「ともに学ぶ」ための話し合いの仕方や発表の技術を修得する。「子どもに学ぶ」は実際に子どもの側に身を置き観察し、記録し、振り返り子どもを理解する力を高める。「ともに学ぶ」は、観察の成果を仲間との対話により振り返り、子どもの側に身を置き子どもを理解するための観察力を高めること、討議・発表を通して仲間とのコミュニケーション力をつけることとする（図1 プログラムの特色「4年間の学びの循環」参照）。

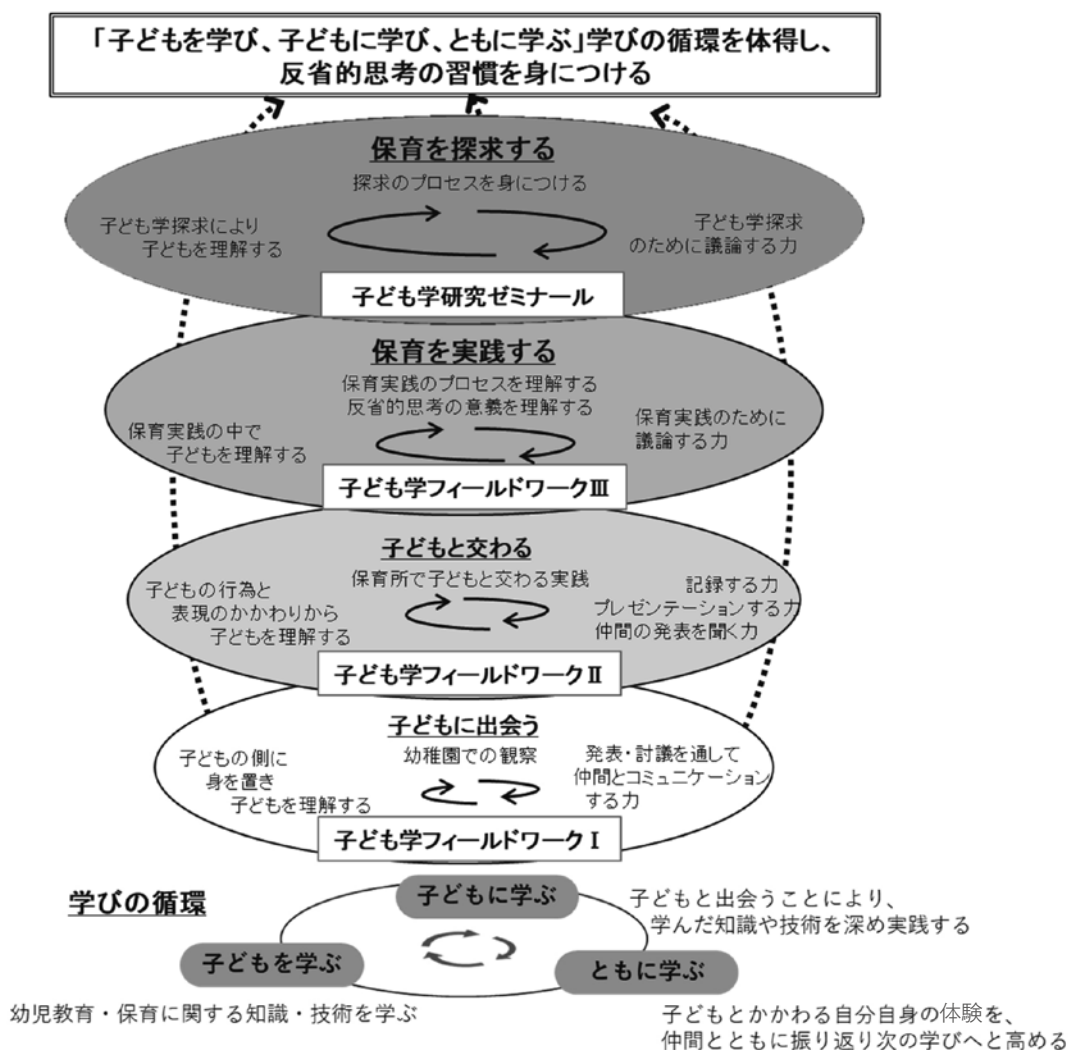


図1 プログラムの特色「4年間の学びの循環」

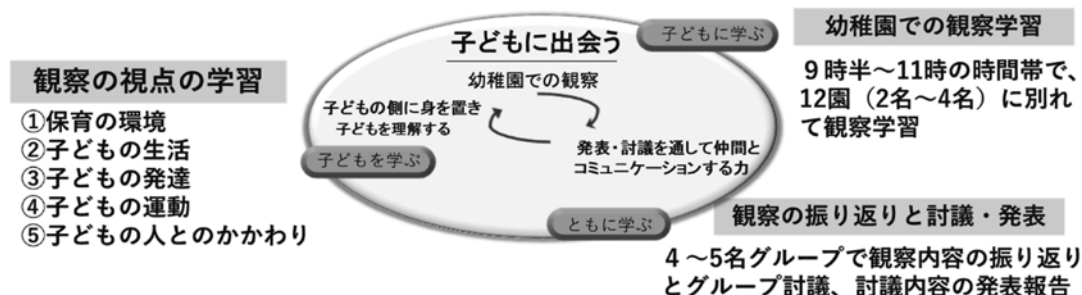


図2 「子ども学フィールドワークⅠ」授業概要

#### 4. 「子ども学フィールドワークⅠ」の授業計画

本授業は、通年4単位の演習科目として計画した。1年間の授業は、以下（1）から（4）に述べるように4つのパートからデザインする。

##### （1）本授業のねらい（4年間の学びと生活を通して）

学生が4年間の学びに見通しを持ち、また1年次の学びも自覚的かつ主体的な姿勢で取り組むことができるようにオリエンテーションとして実施する。こども学部こども学科の4年間の学修と本授業の位置づけをカリキュラム概念図<sup>10</sup>で説明し、「子ども学フィールドワークⅠ」の「授業計画」（表1）を配布して説明する。

##### （2）初年次教育

保育現場に出るための前段階の教育として、また、観察学習の省察と討議・発表の基礎として以下のような教育を実施する。

###### 1) 柳城の歴史と教育

自校史を学ぶことで、大学に帰属意識を持ち、アイデンティティが形成されることを目的としている。学院の120年余の歴史と伝統によって、近隣幼稚園や保育所やこども園との信頼関係が構築されていることを理解し、感謝と誇りをもって学習に取り組む姿勢を形成することもねらいとしている。キリスト教主義の建学の精神など本学の特色を理解できるよう、この回は講師として、「キリスト教概論」等を担当する教員に協力を依頼し実施する。

###### 2) 学生・社会人としてのマナー

学外へ学習に出かける機会の多い授業である。学生としてまた社会人として、身だしなみ、言動に注意を払うことができるようになることをねらいとしている。

###### 3) ノートの取り方・レポートの書き方・図書館の活用方法

本授業をはじめ授業全般にわたり、課題レポートに取り組む際の注意点を中心に学習する。

図書館司書による文献検索の方法等、図書館オリエンテーションと、2、3年次で「論文作成法」等を担当する教員の講義から構成する。

###### 4) 図表の読み方・書き方（情報機器の活用の基本）

データに基づいて客観的に考えるための基礎として図表の読み方を学び、発表の際に情報機器を用いて観察したことを図表で表記して発表できるよう、プレゼンテーションの基礎を学習する。また、SNSに関する注意など情報リテラシーについても学習する。「調査統計法」等を

「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（3）

担当する教員により実施する。

(3) 「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」学びの循環

授業時間は、1 循環を 5 コマ（10 時間）から構成する。

- 1) 子どもを学ぶ：観察の視点学習（1 コマ）
- 2) 子どもに学ぶ：幼稚園での観察（2 コマ）
- 3) とともに学ぶ：グループ討議と発表（2 コマ）

5 つの観察の視点で学びの循環、上記の 1) から 3) を繰り返す。5 つの観察の視点は、①保育の環境、②子どもの生活、③子どもの発達、④子どもの運動、⑤子どもの人とのかかわりである。

(4) まとめと課題（ポートフォリオによる学修履歴と課題の整理）

各回の学びの履歴を学生が確認できるよう、毎回の授業記録用紙、課題用紙、資料、提出物をポートフォリオとしてファイルする。本授業の学習が他の教科とどのように関連しているのか、本授業が学びの循環の基軸となっていることを自覚できるよう、最終回では 1 年間の授業を振り返り、グループで話し合い発表する。

表 1 「子ども学フィールドワークⅠ」授業計画

前期	テーマ		主な内容
1	柳城での 4 年間の学びと本授業のねらい		・授業のねらいと内容 ・授業予定について ・ポートフォリオの作成について
2	柳城の歴史と教育 柳城での学生生活		・柳城の歴史と学生生活について ・講義内容を受けての話し合い
3	レポートの書き方・図書館の活用方法		・レポートの書き方の基本ルール ・話し言葉と書き言葉について ・図書館の活用方法
4	図表の読み方・書き方 情報機器の活用方法について		・観察内容を図表で表記する ・SNS に関する注意事項 ・観察記録・発表の視覚呈示等における情報機器の活用
5	学生生活・社会人としてのマナー 幼稚園での観察学習の心構え		・挨拶や敬語について ・授業形態と単位（実習・就職との関連） ・幼稚園での観察学習の心構え（持ち物・服装、課題など）
6	幼稚園での観察学習 ①	観察の視点指導 （保育の環境）	・観察の視点に関する学習 ・幼稚園教育の基本：環境を通して ・領域「環境」
7	〃	幼稚園の保育環境を観察する	≪観察時間：9：30～11：00≫
8	〃	振り返り・グループ討議	・幼稚園の環境図を作成する ・幼稚園の 1 日を図にする ・保育者の環境整備
9	〃	グループ発表・討議	・討議内容をまとめて発表 ・観察学習の注意事項

10	幼稚園での観察学習 ②	観察の視点指導 (子どもの生活)	・観察の視点に関する学習 ・保育環境における子どもの生活
11 12	〃	幼稚園で子どもの生活を 観察する	≪観察時間：9：30～11：00≫
13	〃	振り返り グループ討議	・学生が観察内容についての記録を持ち寄る
14	〃	グループ発表・討議	・討議内容をまとめて発表
15	前期の振り返り グループ討議		・ポートフォリオによる学修履歴と課題の整理
16	前期の振り返り グループ発表・討議 観察学習③～⑤について		・後期への課題の整理・発表

後期	テーマ		主な内容
17	後期授業について		・観察学習と振り返り・グループ討議・発表の繰り返しの意義 ・観察園へのご挨拶について ・撮影の許可について
18	幼稚園での観察学習 ③	観察の視点指導 (子どもの発達)	・観察の視点に関する学習
19 20	〃	幼稚園で子どもの遊びと 発達を観察する	≪観察時間：9：30～11：00≫
21	〃	振り返り・グループ討議	・学生が観察内容についての記録を持ち寄り報告する
22	〃	グループ発表・討議	・討議内容をまとめて発表
23	幼稚園での観察学習 ④	観察の視点指導 (子どもの運動)	・観察の視点に関する学習
24 25	〃	幼稚園で子どもの動きを 観察する	≪観察時間：9：30～11：00≫
26	〃	振り返り・グループ討議	・学生が観察内容についての記録を持ち寄り報告する。
27	〃	グループ発表・討議	・討議内容をまとめて発表
28	幼稚園での観察学習 ⑤	観察の視点指導 (子どもの人とかかわり)	・観察の視点に関する学習
29 30	〃	子どもの人とかかわりを 観察する	≪観察時間：9：30～11：00≫
31	〃	振り返り・グループ討議	・学生が観察内容についての記録を持ち寄り報告する。
32	〃	グループ発表・討議	・討議内容をまとめて発表
33	まとめと課題 振り返りとグループ討議		・ポートフォリオによる学修履歴と課題の整理
34	グループ発表・討議		・1年間の学びをまとめ、次年度へ向けての課題を分かち合う

## 5. 「子ども学フィールドワークⅠ」における学びの循環

「子どもを学ぶ」、「子どもに学ぶ」、「ともに学ぶ」それぞれに関する教育方法については、以下のように構成する。

### 1) 「子どもを学ぶ」

5つの観察の視点それぞれに関して、1年次に開講している科目の授業内容や、幼稚園教育要領の5領域の「ねらい」や「内容」を考慮し、観察の視点を明確にする。5つの視点に関する学習内容は以下のとおりとする。

- ① 「保育の環境」では、環境の意義と幼稚園の1日の流れを学習
- ② 「子どもの生活」では、保育者は環境をどのように整えているか、子どもは環境にどのように関わっているか、この2点をポイントとして学習
- ③ 「子どもの発達」では、発達心理学、教育心理学の教科内容から、子どもの発達を捉えることを学習
- ④ 「子どもの運動」では、子どもの遊びと発達という観点から子どもの動きを捉えることを学習
- ⑤ 「子どもの人とかかわり」では、人と人のかかわりは、行為の背後にある思いのやり取りであることを理解することを目的とし、子どもや保育者の思いを想像してみることを学習

### 2) 「子どもに学ぶ」

2名から4名のグループに分かれて幼稚園に出かけ、9時30分から11時まで観察を行う。目的は、観察の視点に基づき、実際の子どもの姿を捉えることである。方法としては、タブレット撮影（許可が出た園のみ）とメモをしてくる。そして、自宅に帰りその日のうちに、翌週のグループ討議に活用するため、観察を振り返りエピソード記録を書き上げる。

### 3) 「ともに学ぶ」

観察した自分自身の体験を、仲間とともに振り返り次の学びへと高める。

#### ① グループ討議（1コマ）

各自の観察の記録をもとに話し合う。そして、発表のテーマを決め準備の打ち合わせをする。発表の準備は、授業時間外にお互いに時間調整をして行う。

#### ② グループ発表（1コマ）

グループメンバーで、授業時間外に準備・練習をして発表する。発表方法は、8つ切り画用紙4枚で紙芝居方式の呈示資料を作成し書画カメラを用いて発表するという方法や、中央に映像や文章によるエピソードを表示し、周囲にコメントを書くドキュメンテーション方式のスライドを作成して発表するなど、学生の発表の力を見極めながら設定する。

## 6. 主体的な学習を支えるしくみ

本プログラムは、「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」という学びの循環を4年間繰り返すことで、「省察力」を深め、「保育を探究」する力をつけ、自律的に学ぶ姿勢を持った、「成長し続ける保育者」を養成できると考えた教育プログラムである。自律的に学ぶ姿勢は、学生が養成教育プログラムに意味を見出し、主体的に取り組むことにより形成され则认为る。

学生が主体的に学ぶためには、授業の目的、意義を自覚し学ぶことが重要であると考え、以下の



ような方法をとることとした。4年間の学習における「子ども学フィールドワークⅠ」の位置づけは、前期1回のテーマを「柳城での4年間の学びと本授業のねらい」とし、「子ども学フィールドワークⅠ」の学習が2年次以降どのように展開されるのかを解説することにより理解を促す。そして、2回のテーマを「柳城の歴史と教育・柳城での学生生活」とし、4年間の学生生活全般についての理解ができるようにする。

各回の授業内容に関しても、授業の最初に当日の授業内容について配布した授業計画表（表1「子ども学フィールドワークⅠ」授業計画）を用いて説明し学生の理解を促すこととする。さらに、授業回ごと、その回の授業内容から学んだことを振り返り、次の授業に向けて課題を見出しながら学習を進めていくことができるような課題を学生に課すこととする。

各回の授業での内容を記録するための記録用紙、課題用紙（上記の課題記入のための用紙）、必要に応じて配布された資料をファイルし、1年間のポートフォリオを作成するよう指導する。前期と後期の最後の授業では、チェック表を配布し各自のファイルがすべてもれなく綴じられているか確認し、ファイルの内容に沿って半期の授業または、1年間の授業の振り返りができるよう計画する。ことに最後の授業では、本授業が学びの循環の基軸となっていることを自覚できるよう4年間のカリキュラム概念図<sup>10</sup>を配布し、本授業の学習が他の教科とどのように関連しているのか、また、1年間でどのような学びの成果があったのか、グループで話し合い発表する時間を設けている。

## 7. おわりに

本稿の課題は、考案した「一人一人の子どもに寄り添い、保育を創造する保育者へと成長し続ける実践家」を養成するプログラムに関して、その理論的背景を踏まえ、学生にとって4年間のプログラムが一貫した学びとなるよう、第1ステージの「子ども学フィールドワークⅠ」の具体的な教育方法を明らかにすることである。4年間の学びの中での「子ども学フィールドワークⅠ」の位置づけを明確にするために、まず、「成長し続ける保育者」を養成するプログラムの特徴について確認した。次に、「子ども学フィールドワークⅠ」の授業概要を、そして、実際に授業実践が行えるよう1年間の授業計画を明確にし、「子ども学フィールドワークⅠ」の学びの循環に関しても検討した。さらに、自律的に学ぶ姿勢を育てるための方策として、学生の学びが主体的なものとなるような教育方法についても検討した。

理論的背景を踏まえ、4年間の一貫した学びが提供できるよう考慮し具体的な教育方法を検討したため、教育方法をかなり詳細なところまで明確にする必要にせまられた。しかし、授業実践は教育臨床であり、目の前の学生の状況を読みながら進めていくことが肝要である。次のような課題に、これから実践しながら取り組んでいく必要があると考える。

ここに示した教育方法を基本に、複数担当で実践するためには事前、事後の打ち合わせが鍵となると考える。また、「子どもに学ぶ」として、一般の実習よりかなり早い1年の前期から、保育実践の場である幼稚園に出かけていく計画であるため、このプログラムの意義や指導方法について、観察受け入れ幼稚園には綿密に説明し共通理解を図る必要があると考える。「ともに学ぶ」として実施するグループ討議やクラス発表について、さらに検討が必要となるだろう。グループ討議に関しては、教員はどこまで介入すべきかということも検討課題となる。グループ発表においては、自分たちの発表が気になりで他のグループの発表を聞くことがおろそかになることも予想される。発

表グループの話の聞くことができるように記録の取り方などの工夫が課題となる。

「「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（4）」では、本授業を実際に実践して見出された課題をについて検討していくこととしたい。

## 【付記】

本稿は、日本保育学会第74回大会（2021年5月オンライン開催）において「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（3）と題して、ポスター発表を行った内容に加筆修正し論文としたものである。

## 【註】

- 1 津守真の著作のうち、彼の保育思想を検討するにあたって、以下の文献を中心に参考にした。  
津守真『保育者の地平－私的体験から普遍に向けて』ミネルヴァ書房 1997 年  
津守真「保育の知を求めて」『教育学研究』第 69 巻第 3 号 2002 年  
津守真『保育の体験と思索－子どもの世界の探究－』大日本図書 1980 年
- 2 D. ショーンの著作のうち、以下文献を検討の中心とした。  
Donald A. Schön (1983) *The Reflective Practitioner : How Professionals Think in Action*. Basic Books. (D・ショーン、佐藤学・秋田喜代美 訳 (2001)『専門家の知恵－反省的実践家は行為しながら考える』ゆみる出版)  
Donald A. Schön (1987) *Educating the Reflective Practitioner : Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions*. Jossey-Bass.
- 3 日本保育学会第 73 回大会において、共同で 2 つのポスター発表を行った。  
髙橋久美子・野田さとみ「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（1）  
野田さとみ・髙橋久美子「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（2）
- 4 髙橋久美子「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（1）－理論編－『名古屋柳城女子大学研究紀要』創刊号 pp.47-62. 2021 年  
野田さとみ、髙橋久美子「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（2）－4 年間の学びを支えるしくみ－同上誌 pp.63-70.
- 5 津守真「保育の知を求めて」『教育学研究』第 69 巻第 3 号 2002 年
- 6 Schön (1983) *The Reflective Practitioner : How Professionals Think in Action*. Basic Books.
- 7 Schön (1983) pp.131-132. (『専門家の知恵』p.119.)
- 8 津守真『保育者の地平－私的体験から普遍に向けて』ミネルヴァ書房 1997 年 p.239
- 9 津守真「保育の知を求めて」p.39.
- 10 「「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（2）－4 年間の学びを支えるしくみ－」に、「図 2 カリキュラム全体の概念図」として掲載した。

## **Educating Reflective Practitioner at the Nursery Teachers Training College (3) : Educational Method of “Child Studies Fieldwork I” Class**

Bingushi, Kumiko\* Noda, Satomi\*

これまでの一連の研究成果から津守真の保育思想とD・ショーンの「反省的实践家 (reflective practitioner)」の概念・教育方法を参考にして、4年制大学における保育者養成教育を検討し、「成長し続ける保育者」を養成するプログラムを考案した。「一人一人の子どもに寄り添い、保育を創造する保育者へと成長し続ける実践家」を養成するプログラムである。

本稿の課題は、考案したプログラムの理論的背景を踏まえ、4年間のプログラムが一貫したものとなるよう、第1ステージの「子ども学フィールドワークⅠ」に関して具体的な教育方法を明らかにすることである。4年間の学びの中での「子ども学フィールドワークⅠ」の位置づけを確認し、実際に授業実践が行えるよう「子ども学フィールドワークⅠ」の授業概要、1年間の授業計画、学びの循環について明確にした。また、自律的に学ぶ姿勢を育てるための方策として、学生の学びが主体的なものとなるような教育方法について検討した。

具体的な教育方法は、理論的背景を踏まえ、4年間一貫した学びが提供できるよう考慮すると、かなり詳細なところまで明確にする必要にせまられた。しかし、授業実践は教育臨床であり、目の前の学生の状況を読みながら進めていくことが重要となる。以下のような課題に、これから実践しながら取り組んでいく必要があると考える。

複数担当で実践するためには事前、事後の打ち合わせが鍵となること、観察園へこのプログラムの意義や指導方法について綿密に説明し共通理解を図ること、グループ討議については教員の関与の仕方、グループ発表においては他のグループの発表を聞くための工夫が課題となる。

キーワード：4年制大学の保育者養成、津守真、D・ショーン、反省的实践家、成長し続ける保育者

---

\*Nagoya Ryujō Women's University

